

公益財団法人 日本中国国際教育交流協会

【2017年度の歩み 会報第24号】



■派遣
■受入

第17次教育訪中団
第4次宋慶齡基金会教育交流代表団
第2回日中音楽教育交流会
東平県音楽教育支援

■支援
■研究等助成

第6回ホームステイ（千葉）
第3回日中教育文化シンポジウム
第13回日本語作文コンクール

2018年3月発行

昨年度「第2回日中教育交流シンポジウム」と言う形で、日中の学生を中心とする教育文化交流を計画し実施しました。パネラーには、今年度の日本語作文コンクール最優秀賞の宋妍さんと、過去の入賞者等2名と、中国への留学経験がある日本人青年3名を選びました。また今年度は、衆議院議員で日中友好議員連盟の幹事長でもある近藤昭一氏の講演を入れるなど工夫しました。日中を中心とする教育文化交流活動を活発化させるための、大きな意味ある取り組みとして「第3回日中教育交流シンポジウム」も成果を上げることが出来たと思います。今年度も日本語作文コンクールへの取り組みとも関連させる中で、日本と中国の若者の意識に焦点を当てて、両国の歴史性を踏まえた関係認識を考えていくそんなシンポジウムとして実施しました。

（1）第3回日中教育文化交流シンポジウム実施計画

- 1 実施目的
 - 日本と中国の文化・教育等について語り、交流し、相互理解を深める。
 - 日中両国の文化・教育に対する理解の深まりを、日中両国の友好の礎を担う人材の育成に生かす。
- 2 実施日時 2018（平成30）年3月3日（土） 13：30～17：00
- 3 実施場所 日本教育会館9階第5会議室（千代田区一ツ橋2-6-2）
- 4 参加者
 - ・日本と中国の青年（中国からの留学生＜15人＞、日本の学生＜15人＞、日本の教職員＜35人＞）
 - ・協会顧問・理事・評議員・賛助会員・関係者・一般15人
 - ・全参加者数80名
- 5 講師・コーディネーター・パネラー
 - ・講師＝近藤昭一衆議院議員 演題「日中関係と若者の役割」
 - ・コーディネーター＝日本僑報社・日中交流研究所代表 段 躍中氏
 - ・パネラー＝宋 妍（第13回中国人の日本語作文コンクール最優秀賞受賞者）
 - 郭 可純（第12回中国人の日本語作文コンクール一等賞受賞者）
 - 徐 博晨（東京大学大学院留学生）
 - 市川真也（早稲田大学四年生）
 - 宮川 咲（公益財団法人国際文化フォーラム職員）
 - 鈴木由希（中華圏エンタメライター）
 - ・講評＝水岡俊一前参議院議員・元内閣総理大臣補佐官
- 6 選 定
 - ・留学生については、日中交流研究所やフジ国際語学院等を通じて公募する。
 - ・日本人学生については、日中交流研究所や関係団体を通じて公募する。
- 7 内 容 講演とパネルディスカッション
- 8 日 程 シンポジウム
 - 13：30 開場・受付
 - 14：00 開会（黒田理事長挨拶・興石顧問挨拶）
 - 14：10 講演
 - 15：10 交流シンポジウムの方向付け（コーディネーター）
 - 意見交流（パネラー）
 - 総括（コーディネーター）
 - 16：50 講評
 - 17：00 閉会

※協会顧問・関係役員・理事・評議員・監査員・コーディネーター・パネラーによる交流会（懇親会）を教育会館内の中華料理店で開催いたします。

(2) シンポジウム内容報告

① 講演

日中友好議員連盟幹事長・衆議院議員 近藤昭一先生



近藤昭一先生

シンポジウムの意義づけを踏まえ、内容をより深めていくために、日中友好議員連盟の幹事長であり、中国への留学経験もある衆議院議員の近藤昭一先生に、「日中関係と若者の役割」についてご講演をいただきました。日中平和友好条約締結40周年に当たる今年、改めて両国の歴史・現状・今後について考えることは、大変大きな意味があります。近藤先生の貴重な体験を踏まえたお話をうかがうことができ、大いに学習を深めることができました。

先生は、大学時代に中国の北京語源学院に1年半留学をされました。まずその時のお話を聞かせていただきました。何故中国へ留学したのか、そのわけは、「外国で暮らしてみたい。」「あまりみんなが行ったことのないような国へ留学してみたい。」「日本とは政治・社会体制の違う国へ行っていろいろと経験してみたい。」と思ったからだと言われました。そして中国への留学体験が、自分の人生にいかに大きな影響を与えてくれたかについて話していただきました。まず、当

時の中国の様子「個人所有の車なんて無かったこと」「サービス精神など無かったこと」、そのことから、「中国が短期間に大きな変化・発展を遂げるなんてとても考えられない。」と、思っていたことを話されました。しかし、中国は、あれから驚くべき発展を見せています。「面積も人口も何でもかんでも日本の10倍以上で、あつという間にGDPも日本の2.7倍になり、日本を追い越して世界で2番の経済大国になった。」と指摘されました。それは、「中国の人々が熱心に頑張ってきた。」「体制の中でいろんなことを工夫してやってきた。」「政治闘争の中でも、経済政策を推し進めた。」「大きな改革を通して人々が努力してきた。」その成果だと思われ指摘されました。今では、「中国の発展やパワーは脅威だ。」と感じている人が大勢いることも話されました。日中国交回復からつい最近までは、その関係は非常に良好で、お互いがお互いを重要視して、過去の不幸な歴史にもきちんと向かい合おうという関係も生まれてきていたと言われました。そして、「政治は、民間や経済の交流に大きな影響を与える。」という側面があるということから、現在近藤先生が幹事長を務める「日中友好議員連盟」は、国会内で最大の超党派の議員の集まりとなっていること、その活動の歴史についても話していただきました。しかしながら、ある時期から、尖閣諸島の問題等で日中関係は非常に悪化してきていること、それにつれて日中友好議員連盟の訪中に対しても、国家主席等の中国政府の要人・幹部が出てくることはなくなっていること等について話されました。また、先生の地元である名古屋市は南京市と姉妹都市になっているが、市長の「南京事件はなかった。」の発言以来、全ての公式な行事や交流は止まっていることも話されました。近藤先生は、「中国や韓国・朝鮮やアジアとの関係を良好なものにすることが、自分の大きな政治課題として考えている。」と述べられ、「今だから

こそ難しい政治の話をしていかなければ…。世の中の多くの人々の雰囲気を変えていかななくては…。と考えて、中国での当時の経験やそれに関わるいろんなことをいろんな場面で話させていただいて。」と言われました。たとえば「中国では一度知り合うと『老朋友(ラオ・ベン・ユ) = 古くからの友人』というが、日本人はそう言われると何かとまどってしまう。」とか「中国では宴会で『飲め! 飲め! 乾杯! 乾杯!』で、た



日本教育会館9階会議室でのシンポジウムの様子

まらない…。」等のどちらかという批判的な話について、「中国では本当の心からの友人のことは『自己人(ツウ・ディー・レン) = 身内・親しい間柄の人』と呼ぶこと」や、「『酒逢知己千杯少(ヂ(オ)ウ・ファン・ディー・ディー・チエン・ペエイ・シアオ) = 酒は知己(ちき。己を知ってくれている人)と飲めば、千杯飲んでも足りない』という言葉がある」ことについて説明してくれました。文化の違いや体制の違いについて理解し合うことの大切さについて指摘されました。「中国の人には中国の人の文化や考え方、ものの見方がある。日本人と違う。違うところから出発していることを理解しないと駄目だ。」「相手を脅威だと思えば脅威にもなるし、相手だってそう言われれば脅威になる。そうならない関係を作っていかなければならない。」と、日中関係の基本について話されました。「日本にいて、中国のある面だけを強調した情報にだけに接していると、まことに偏った中国像が造られてしまう。」「『実態とは何か』それはかなり難しい問題だと思うが、その実態を伝え合うのが皆さんだし若い人たちだと思う。』その為には、「日本の若い人たちに、ぜひ海外に出てみて欲しい。中国や外国の人々には、ぜひ日本に来てもらいたい。」「中国の若者が沢山日本語を勉強している。中にはそのことでバッシングに遭う人もいる。それでも日本に来ている。日本の学生にも中国にもっと行って欲しい。」と話されました。そして、「日中関係が本当に良くなるためには、お互いの交流を通して、歴史を深く深く理解していかなければならない。日本人の心にも中国人の心にも本当に相手を理解し和解を求めていく、そういう気持ちを起こさなければ駄目だと思う。」と語り、ドイツのブラント首相がポーランドを訪問したときの謝罪の姿から和解に向かった話や、ドイツとフランスのエリゼ条約の中身について、さらにはEUにも触れながら、真の和解を得るために「民間や学生の交流、特に若い人の交流が大切だ。」と指摘されました。まとめとして、「今年は日中平和友好条約締結から40周年。まだまだ課題があるが、さらに深い交流を深めることを、皆さんに期待します。日本中国国際教育交流協会の、教育を通して日中・アジアの歴史を確りととらえていくという大切な活動に大いに期待しています。皆さんのご奮闘をお祈りします。私もいっしょに頑張ります。」と話され、講演を締めくくりました。

② パネルディスカッション

パネルディスカッションは、日中交流研究所所長の段躍中氏にコーディネーターをお願いし、中国の若者(日本語作文コンクール受賞者)3名と日本の若者(中国留学経験者)3名の計6名にパネラーをお願いして行いました。

段さん(コーディネーター)に、第13回となった日本語作文コンクールの今までの取り組みの様子や成果について、また、パネラー全員の紹介もしていただきました。さらに、この日中教育文化交流シンポジウムがどういった経過で開催されることになったのかに触れながら、今回のパネルディスカッションの方向付けをしていただきました。

「宋さんには、基調報告のあとで、日本に来て一週間で感じたことの感想発表と日中交流・日中青年の役割について話してください。」パネラーの皆さんには、「まず自分の自己紹介を含めて日中交流についての若者の役割について感じていることを話してください。」と、コーディネーターがありました。

宋さんからは、まず、パネルディスカッションの基調提案として、日本語作文コンクールの最優秀賞(日本大使賞)テーマ=中国の「日本語の日」に私ができること～『日本語の日』に花を咲かせよう～の発表がありました。(別項参照)



宋 妍さん

宋さんは、まず、「日本に来て、沢山の政治家や企業の方々に会い一週間があつという間だった。」「押しボタン式の信号に感心した。中国に輸入したいと思った。」「二階幹事長の言葉『琴線に触れた』が心に残った。」「日本に来たのは3回目、前の2回は日本語スピーチコンテストで受賞し、招待された。」「はじめ日本語の勉強をすることは恥ずかしかったけど、今は日本語を勉強して良かったなと思ってる。」「日本の企業・団体や沢山の人が、日本語の学習者に多くのチャンスを与えてくれていることに感謝している。」「日本と中国の交流のことに努力している日本人の方々に感謝している。」という発言がありました。

郭さんは、「第11回と第12回の作文コンクールで受賞することができた。第12



段 躍中さん

回の作文は、以前神戸大学に留学したときにホストファミリーだった中井さんのお母さんのことについて書いた。昨年神戸を訪ねて、第12回作文コンクールの作品集をお母さんにプレゼントしたら、自分の名前が載っている本をもらってとてもうれしいと喜んでくれた。ホームステイの時の写真が飾ってあった。そして、『郭さんが神戸にいても私の子どもだよ。』と言ってくれた。私はとても感動して、2年前に結んだ絆はこれからも続いていくと思った。「小さなこと、その小さなことの積み重ねで、きっと大きなこと立派なことができるだろうとずっと信じている。」「今、社会人として東京で働いている。多くの日本の方々に恩返しをしたいと思っている。私の力は小さいけれど、できるだけ自分なりの努力で、『日中友好の花がもっと綺麗に咲けるように』頑張っていきたい。」という力強い話がありました。



郭 可純さん

徐さんからは、「大学の博士課程で日本の海外援助=ODAについて専門的に研究しているが、中国は、改革開放以降3兆円以上もの援助を日本から受けている。また、北京外国語学院の日本語研究センターのように日本の援助で設立された学部もある。日本からの多大な援助に対して感謝している」という発言がありました。そして、日中関係については、他の国々の関係とあまり比較はしていないのではないかと話、「近藤先生の話にあった『ドイツとフランスの関係』についてうらやましいと思うこともある。日米や日台関係は堂々と友好宣伝をしているのに、日中は何故と思うこともある。日中友好と言いつつ、私自身もつらい経験を何度も味わったことがある。しかし、他と比較しなくても、今この場に、こんなに温かい人がいる。決して少ない人数ではない。中国13億人、日本1億3千万人の中に、日中友好を真剣に考える人がこんなにいる。ヘイトスピーチなどあるが、そんな人たちより今日ここに集まっているような人の方がずっと多いと



徐 博展さん

思う。だから、私は日中関係について楽観的になっている。楽観的な未来を作っていきたいと思う。」という発言がありました。

段さんから、「次に発言してもらう市川さん、宮川さんは、『第1回忘れられない中国留学エピソード』の一等賞受賞者です。近藤先生は、特別賞受賞者です。」という紹介がありました。

市川さんからは、「作文のタイトルは、『現場に行くこと』だった。行って見て、自分の目で見ることの大切さについて、中国への留学経験を通して考えたことを書いた。」「日本にいて、ネットなんかを見ていると、中国や韓国に対してヘイトに近い考えを持ってしまう。自分もそうだった。」「しかし、大学で中国等からの留学生と交流したり、留学の経験をしたことによって、どんどん自分の考えが変わっていった。」「残念に思っているのは、問題意識を持って動いている若者は、自分の周りにはほとんどいない。たとえば南京事件についても、数の問題はともかくとしても何時どういことが起こったのか知っている人は、大学4年間で1~2人しかいなかった。歴史教育でそんなことは教わっていない。自分自身もある時までは知らなかった。」「現場に行くことの大切さを思う。南京にも行ってみた。得たものが沢山あった。」「マスメディアが抱えている問題は大きいと思う。中国のマスメディアに対するしめつけや弾圧も気になる。」「南京事件について中国で取材を受けたとき、『こんな悲惨な出来事があったなんて信じられない。』という意味で『信じられません。』とコメントしたら、『市川さんは、南京虐殺を信じていません』と書かれてしまった。』と、具体的に語ってくれました。4月からマスメディア関係に就職するということを踏まえ、『自分がやっぴかなくてはいけないことが沢山ある。』と決意を述べていました。



市川真也さん



宮川 咲さん

宮川さんは、「高校で中国語を勉強し、上海の大学へ4年間留学した。その時経験したことを書いて、作文コンクールに応募した。学校の裏の文房具屋のおば

さんとのエピソードを書いた。よくしてくれたおばさんは、多分日本とか日本人に良い印象を持っていなかったのではないかと。あるとき、『日本人なのによくしてくれるのよ。』という、おばさんの立ち話を耳にして、『日本人への印象が私を通して変わったのならうれしいな。』と思った。今でも交流している。」「『第1回忘れられない中国留学エピソード』は、日本語と中国語でそれぞれ出版されている。ぜひ読んで欲しい。自分が経験したことが、他の人につながっていくということが大切だと思う。留学の4年間で経験したようなことは、ある意味で代表として経験したことでもあるので、そのことを皆さんにお伝えしていくということが、経験した者の使命でもあると思う。』と話されました。そして、現在宮川さんが務めている財団の仕事に関わらせながら、『高校生や先生方が、海外特に中国・韓国・ロシアと交流できるイベントを計画し実行している。日本語を勉強する中国人はとて多い。また、中国語を学ぶ日本人もとて多い。学んだ言葉を使う機会が少ない。アニメや何かが好きだから勉強した語学が使える場を作っていく、そして交流しその国の人とつながっていく。そんな場を作りたい。』と、熱く語ってくれました。

鈴木さんは、国立台湾大学へ留学した時の経験とその後の中国との関わりについて話してくれました。「中国語については、卒論を書くためのツールでしかなく、卒論が終われば…と、思っていた。」というような感じだったところから、『中華エンタメ・コンテンツはものすごく面白いと思ひ、少しずつツイッターやフェイスブックで、面白いものを勧める活動を始めた。』という、再び中国にはまるきっかけについて話してくれました。「中国のエンタメは、政治や経済の影響を受けるので、突然番組内容が変更になったりする。」「韓国と関係が悪化した時など、人が消えたりした。」「そんなところから、かえってエンタメについても、より深く勉強するようになった。」「政治がどうなっているのか興味を持った。』とも話してくれました。「コンテンツアニメ・ドラマ・アイドル etc. -を好きな人が増えている。世界共通のコンテンツは、共通の話題となる。中国のコンテンツも日本でもっと知ってほしい。」「言葉やイメージが壁になっている面があるので、そうしたところを払拭していけるよう活動している。」「こうしたことに興味を持つ人は増えている。」「そういう番組がどこで見られるのか問い合わせも増えている。」「これをもっと大きな動きにして、そこから日中友好という、相手の国を知ろうという、そんなきっかけづくりの種をまいていきたい。』と語ってくれました。



鈴木由希さん

段さんから、パネラーに、「語学の壁について、それをどう乗り越えるか、勉強法や感じていることを話してください。」と問いかけがありました。



宋さんからは、「日本のバラエティ番組が好きで、その普段使われている日本語から、日本語らしい日本語を身に付けた。」「授業で学んだ日本語は、あんまり使わない言葉があるように思った。』という話がありました。

郭さんからは、「日本人の日本語の先生から、『外国語の勉強は、日々の努力の積み重ねだ。』と教わりました。」「毎日、暗記・暗記・暗記で、特に大学一年の時は、教科書を丸暗記した。」「クラスみんなで、授業の始まる30分位前に、みんなの前に立って、教科書の内容を丸暗記して発表し合っていた。」「1・2年してから、日本語が話せるようになったと実感した。』と、話してくれました。

徐さんは、「自分は日本語学科を出ていない。」「日本語は、環境で学習できる。」「自分は日本に来て、日本の方々と話をしたり、議論をしたりして、そういう中で日本語を学んだ。」「人と交流するというのは、本を読むとかテレビを見るとか違って、分からない単語があっても何となく通じる。分からない単語が勉強できる。交流の場をもっと広げていくとそこで言葉の勉強ができる。』と語ってくれました。

徐さんは、「自分は日本語学科を出ていない。」「日本語は、環境で学習できる。」「自分は日本に来て、日本の方々と話をしたり、議論をしたりして、そういう中で日本語を学んだ。」「人と交流するというのは、本を読むとかテレビを見るとか違って、分からない単語があっても何となく通じる。分からない単語が勉強できる。交流の場をもっと広げていくとそこで言葉の勉強ができる。』と語ってくれました。

段さんから、「中国の若者と日本の若者のディスカッションが、中国で行う時は中国語で、日本で行う時は日本語でできたら素晴らしい。是非そんなことをやってみよう。」という発言がありました。「日本語を勉強している中国の若者の日本語のレベルと、中国語を勉強している日本の若者の中国語のレベルでは、大きな差がある。日本語を勉強している中国の若者の方が、レベルが高い。」その辺はどうかという問いかけがありました。

市川さんからは、「日本人が中国語を覚えるのと中国人が日本語を覚えるのでは、中国人が日本語を覚える方が速い。」「中国に留学した時、中国語を話すことは大事で、それができなければ話にならない。」「日中韓の三カ国の若者が、歴史問題を語るシンポジウムに参加した時、日本の若者が一番弱かった。語学コンプレックスがある。しかし、やらなければいけないことは承知している。」という発言がありました。

宮川さんからは、「高校の第二外国語で中国語を選択して、文法等の基礎などやったのだが、全然頭に浮かんでこなかった。」「上海の大学に留学した時、慣れるのに時間がかかった。4年住んでいたのに、すぐに口も耳も上達した。語学の上達はやはりそこに住むことかと思う。」「上海の大学にいるとき、校庭やトラックを英語の音読しながら歩いている学生を何回も見た。驚いた。語学の勉強に対する意志の強さを中国の学生に感じた。」と、中国の若者の姿を見て、日本の若者はもっと頑張ろうと話してくれました。

鈴木さんは、「日本人が中国語を学んでも、全然しゃべれるようにならない。簡単な会話ならいいが、仕事のことや大切な話は、(日本の国内でも)日本語を習っている中国人についで頼ってしまう。」「そのところをどうするか、それを乗り越える教育というものを一緒に考えていけたらと思う。」という発言がありました。

③講評

前参議院議員・元内閣官房副長官 水岡俊一先生



水岡俊一先生

水岡先生からは、「去年今年と参加させていただいて、『これからの中日・日中関係をこういう若い人たちが背負って頑張ってくれるんだな。』という期待感を持った。」とまずおっしゃっていただきました。その後、パネラー一人一人について、以下の様に講評をいただきました。「宋さんは、日本人もびっくりするような素晴らしい日本語だ。文章もよく練れていて、もちろん素晴らしいが、それに加えて、話し方・発音・アクセント・間の取り方・と、宗さんの努力と宗さんを指導した方々の素晴らしさを感じた。」「郭さんは、昨年の作文が載っている本をプレゼントした話を聞いて、こういうプレゼントに勝るものはないと思った。心を震わせるものは何かということ郭さんの心の中にあるんだと感じた。神戸の中井さんは良い方ですね。神戸には良い人が多い。私も神戸だ。」「徐さんは、沢山話したいことがあるんだと感じた。その中で、『日中関係を語る人が胸を張っているという話は意味深かった。また、楽観的に物事を考えるとい

うことの大切さは、特に研究者世界では必要だと思う。なんでも悲観的になってしまいがちな今の世界にあって、我々の課題の一つではないか。」「市川さんは、自分の目で見る、自分が体験する、自分が聞いてみる、話してみる、尋ねてみる、そして、批判されてみる、そういうことがものすごく大事だということを感じられる人で、こういう人に、マスメディアの世界でぜひ頑張ってもらいたい。」「宮川さんは、私が経験したことが伝わっていく、伝えていくことは使命ではないか。まさに、前に並んでいる今日のパネラー6名の使命を代弁して言ってくれた。人と人がつながっているということの中において、その経験したことが大事、それを伝えていくことが大事だ。」「鈴木さんは、エンタメコンテンツという、きわめて珍しい話だし、貴重だと思った。自分の経験、そういう見方、そしてそれを自分のペンで、言葉で出されているということは、非常に必要なことだ。物事は、いろんな見方、いろんな角度から見るのが大事だ。中日・日中関係においても、お互いのサイドでどういう風に見るのか、また他の国々からはどう見えるのか、もっと勉強しなければならない。ツイッターやSNSでどんどん発信してほしい。」と話してくれました。そして、まとめとして、「今日の6人のパネラーに共通しているのは、『中国のことを勉強して日本のことが分かった。日本のことを勉強して中国のことが分かった。』ということだと思う。自分の国を、自分を好きにならないと人との交流やコミュニケーションは取れないし、大事なことは伝えられない。これからも明るい中日・日中関係のために6人には頑張ってもらいたい。私達も頑張らなくてはならない。昨年今年もとてもいい刺激をこのシンポジウムからいただいた。ありがたいと思った。一緒に頑張ろう。』

「日本語の日」に花を咲かせよう

河北工業大学 宋 妍

去年11月、日本人の先生と大学の食堂へ食べに行ったときの出来事だ。お店の前で、先生と日本語でやり取りしていると、中国人の調理師さんが興味津々でこちらをジロジロ見てきて、突然「あ、日本人ですね。この牛肉ラーメンが一番美味しいですよ。お勧めですよ。」「こちらでゆっくりお待ちください。出来上がったら、お呼びしますよ。」と親切にゆっくりとした中国語で先生に話してくれた。以前は珍しい光景だったが、昨今このような優しい対応が増えている現状に、先生は驚きというよりは、むしろ喜びを感じているように見えた。「日本人とペラペラ話すなんてすごいじゃん。私にも簡単な日本語を教えてくださいませんか?」と調理師の彼は丁寧に私にお願いするやいなや、日本についていろいろ聞いてきた。なるほど、日本に興味を持っている人は少なくないのだ。

今日、日中貿易が盛んになっているため、中国に進出した日本人や、日本に第一歩を踏み出して日本文化を味わう中国人が次第に多くなっている。頻繁な日中交流の流れのおかげで、中国人の日本人に対する印象も徐々に良くなってきただろう。のみならず、日本語や日本人をもっと知りたい中国人も多くなってきているようだ。だが、残念なことに、日本や日本語に触れ合える場が少ないという問題がある。「日本語の日」は、これを打開するのに、まさにうってつけの火付け役に違いない。

ある日の授業で見たビデオで、東日本大震災で被災者がどれだけ大きな被害にあったのか身にしみるほど感じた。そして、NHKで「100万人の花は咲く」のミュージックビデオの活動も知った。日本人はもちろん、オーストラリア人までもビデオを投稿した。外国人が歌うと、メロディーにあまり合っていない子供みたくな歌声だったが、いつの間にか、励ましの声が心の底に届き、私もやりたい思いにかられ、職業を問わず、大学構内にいる人に声をかけて誘ってみた。予想外に、歌ってくれた人は多かった。

最も印象に残ったのは、大学の食堂で働いている青年だ。

「あ、すみません。日本語が全然わかりませんが、参加してもいいですか?」と私は調理師の服装をした彼に声をかけられたので、「はい!もちろんできますよ。教えてください。」と答え、日本語の五十音図からメロディーまで教えた。発音はそれほど正しくなかったが、彼は心を込めて大声で歌ってくれた。

彼のお母さんはお金を稼ぐため、現在日本で働いている。残念なことに、2011年お母さんは日本で地震に遭ってしまった。もともとお母さんとの連絡は少なかったが、その時通信が完全に切れてしまったので、心配でいてもたってもいられなかったと教えてくれた。幸いなことに、日本人のボランティアは、彼のお母さんを助けてくれ、地震発生から数日後、彼は連絡が取れた。母を助けてくれた恩返しをずっとしたいと思っていた彼は、今回の活動はちょうどいい機会だと語ってくれた。

今年の母の日に、彼は撮影した動画をお母さんに送ると、受け取ったお母さんは、そんな彼を誇りに思い、すぐに周りの日本人に見せたそう。みんな「いいね。」と言ってくれた。小さなことかもしれないが、その価値はみんなに認められた。

この一人の青年のおかげで、参加者が増え、中国人の運転手さんやケニア人の院生も参加してくれた。参加者の幸せな笑顔は、まるで花が鮮やかに咲き誇っているようだ。

「日本語の日」に私一人では大したことができないが、日本語を学びたい中国人や、日本の何かの役に立ちたい中国人など、日本語や日本に触れ合いたい一人でも多くの人と共に、日本語を学びながら、「花は咲く」という歌を歌えば、日本人の心を癒すのはきっとできるはずだ。今、私の大学の人々は「花は咲く」を歌っている。今はまだ小さな活動だが、これが中国全土に広がり、いつか国境を越え、山を通り抜け、日本人の心に届くと信じている。